

エドガーと グース

カメの グースと リスの エドガーは、大の 仲良しです。
ある日、二ひきが 森で 遊んでいると、カモの
トークと ウサギの ジェリーが やって来ました。

「ぼくたちと、リレー競争を やらない？」と、
ジェリーが 言いました。

「ぼく、リレー競争は 好きだよ。」と、エドガー。

「ジェリーと ぼくが チーム。そして、エドガーは
グースと チームだよ。」と、トークが 言いました。

「それじゃ 不公平だよ。だって、グースは すごく
のろいんだもの。」と、エドガー。

「だけど、君は 速いじゃ ないか。コースは、
この 道の 終わりまで。向こう側で チームメイトに
バトンタッチして、こっちに 先に もどって 来た
チームが、勝ちだよ。」と、トークが 言いました。

「よ〜い・・・ドン！」 ジェリーが 大声で
言いました。



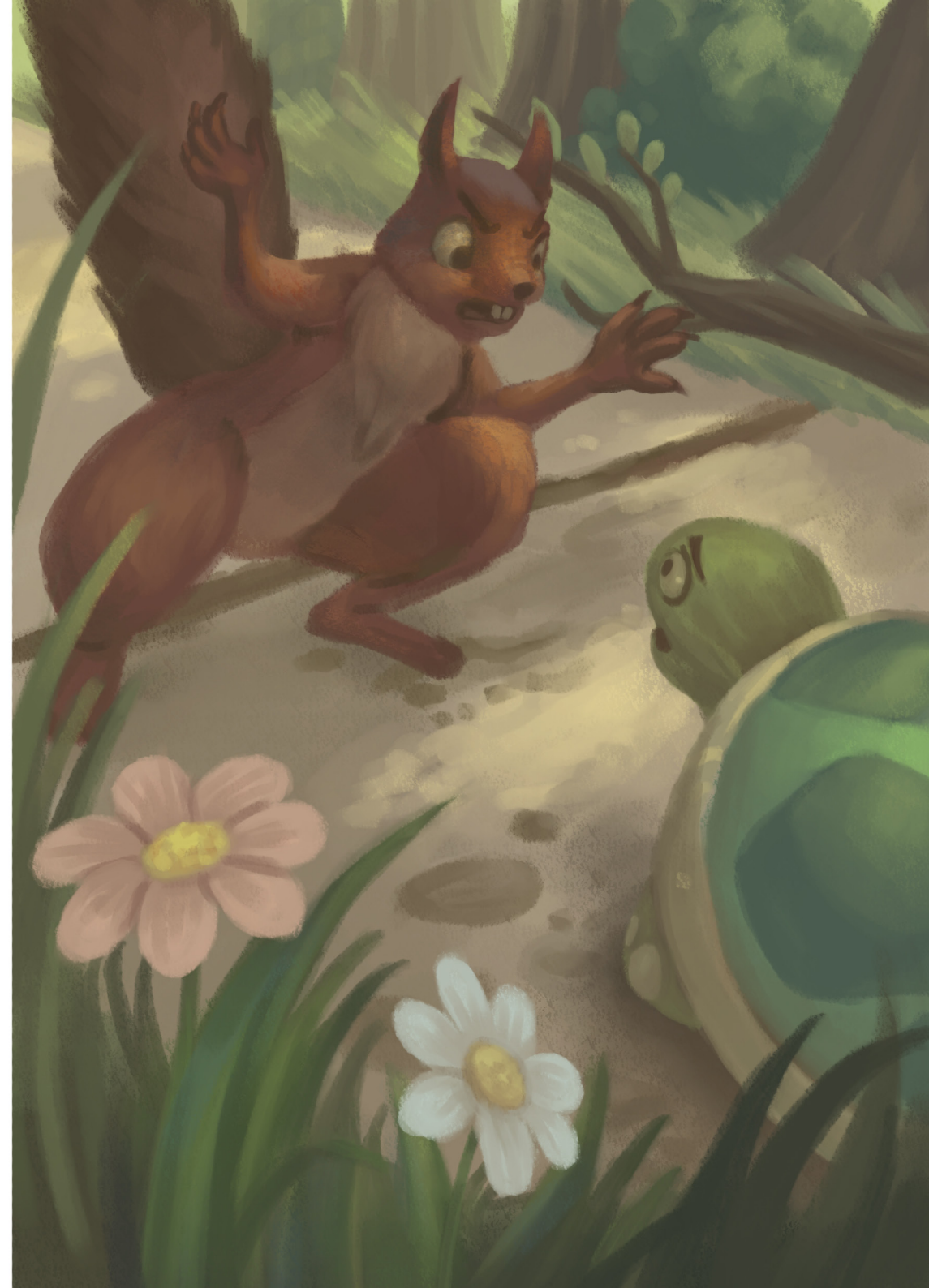
トークとエドガーは、森の道を走り始めました。
エドガーがグースの待つ地点に着くと、カメの
グースはレースの後半を走り始めました。が、
じきに、ジェリーはグースに追いつき、追いこして
しまいました。

「もっと速く！」と、エドガーがさげびました。

でも、カメのグースはのろのろです。ジェリーが
ゴールインした時には、まだコースの半分にも
達していませんでした。

やっとのことでグースがゴールインすると、
エドガーがおこって言いました。「君のせいで、
負けちゃったじゃないか！ せっかく、ぼくが
よゆうのスタートをさせてあげたのに、それでも
負けちゃうなんて！ もう1回やろう。今度こそは、
絶対に勝てるようにするから！」

再び、トークとエドガーが出発点に並び、
「用意、ドン！」の号令で、走り始めました。
エドガーは勢いよく走って行き、グースが
待っている地点に着くと、グースをおんぶして、
また走り始めました。エドガーはカメをおんぶして
走ったことなどないので、ドサッと転んで
しまいました。グースは、エドガーの背中から
勢いよく転げ落ちました。



「助けて！」と、グースが さけびました。グースは
あお向けに なって こうらで くるくると まわ
道を 転がって 行きました。グースは 手足と 頭を
こうらの中に 引っこめ、助けを 求め続けました。
そして、木の えだに ぶつかると、すごい 勢いで
はね返って 道を 転がり続け、ジェリーが 着く 前に、
ゴールラインに すべりこんだのです。

「勝ったぞ！ ぼくたちが 勝ったんだ！」
エドガーが さけびました。

グースは 手足と 頭を こうらから 出し、やっとの
ことで 寝返りを しました。歩こうと すると、まだ
目が 回っています。

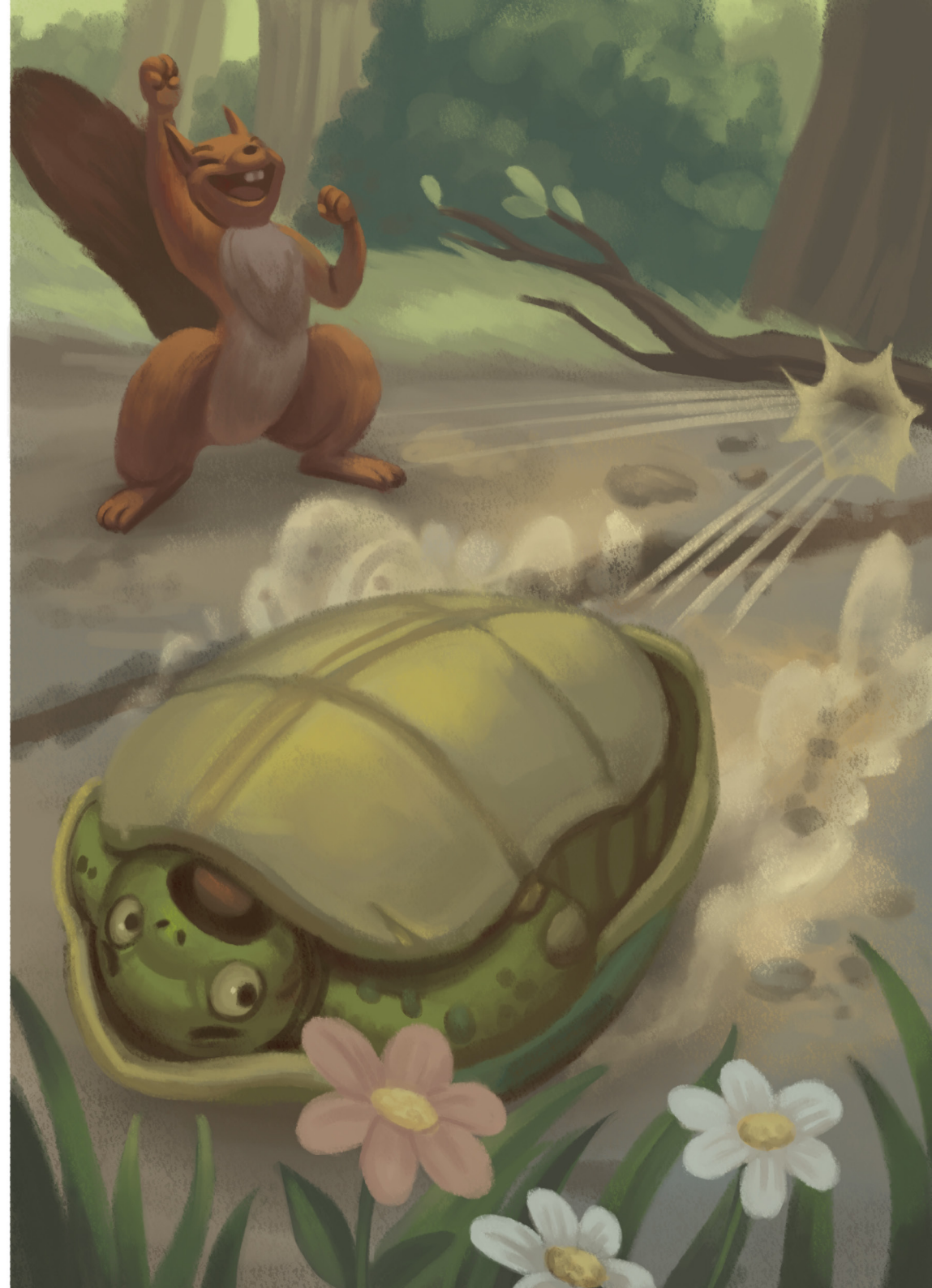
エドガーは グースを 持ち上げ、ぼくたちが
勝ったんだよ、グースは ものすごく 速かったよ、と、
興奮して 何度も 何度も 言いました。

「下ろしてよ！」 グースは おこって 言いました。

「だけど、ぼくたちが 勝ったんだよ！」 エドガーが
また 言いました。

「どうでもいいさ。くだらない 競争だったよ！」と、
グース。

「それに、公平じゃ なかったしね。だって、君は
グースを おんぶしただろ。」と、トークも 言いました。
「行こう、ジェリー。もう 楽しく ないよ。」



「^{いったい}一体 どうしたんだい？」と、フクロウの タフトが たずねました。

「^{きょうそう}ぼくたち、競争してたんだ。そして、ぼくたちが ^か勝ったんだ！」と、エドガー。

エドガーは タフトに、^{きょうそう}競争の ことを くわしく ^{はな}話しました。そして、グースが ゴールに ^む向かって ^とすっ飛んで ^い行った ^{ようす}様子を ^{おも}思い出して ^だ笑いました。
「^{わら}すごく おかしかったんだ！」と、エドガー。

「それで、^{いま}今 ^{きみ}君の ^{とも}友だちは どうしてるんだい？
だいじょうぶなのかね？」と、タフトが たずねました。

エドガーは ^{くち}口ごもりました。「そ、そうだね。
だいじょうぶだと ^{おも}思うけど。・・・グース？」

けれども、グースは もう、^{かわ}川の ^{ほう}方 ^いに 行って
しまっていました。そして、木 ^きの ^あみきに ^あ空いた
^{あな}穴に ^{あな}かくれて いました。エドガーが ^きよぶのを ^き聞くと、
グースは ^{あな}穴の ^ひさら ^ひにおくへと ^ひ引きこもり ました。

「グース？」 エドガーは また よびましたが、
^{へんじ}返事が ありません。

「^{とも}友だちを さがしに ^い行った ^よほうが ^よ良さそうだね、
エドガー。きずついて いるかも しれないよ。おこって
いるかも しれないし。」と、タフトが ^い言いました。



エドガーは道の^{みち}上の^{うへ}方も、下の^{した}方も、川の^{かわ}方も
見^みました。他の^{ほか}動物^{どうぶつ}たちにも、グースを^み見かけたか
聞^ききました。でも、どこにも^み見^みつかりません。

日^ひが^{はじ}しずみ始め、エドガーは、友^{とも}だちの^{こと}が
心^{しんぱい}配^{はい}に^{なり}ました。そして、グースに^{たい}対^{たい}して
思^{おも}いやりが^ななかつた^{こと}を^{はんせい}反^{はん}省^{せい}しました。たおれた
木^きがあつたので、その^{うへ}上に^{すわり}こみ^こみました。とても
悲^{かな}しい^{きぶん}気分^{きぶん}でした。「グース。どこに^おいる^らんだい？
ぼく、さびしいよ！」と、エドガーが^ささ^やき^きました。

木^きの^{なか}み^みき^の中^{なか}に^{かく}れて^{いた}グースに、エドガーの
声^{こえ}が^{きこ}え^えました。（何^{なに}か^い言^いわ^ないと^なあ。）と、
グースは^{おも}思^{おも}いました。でも、まだ^{はら}腹^{はら}が^た立^たち^ます。

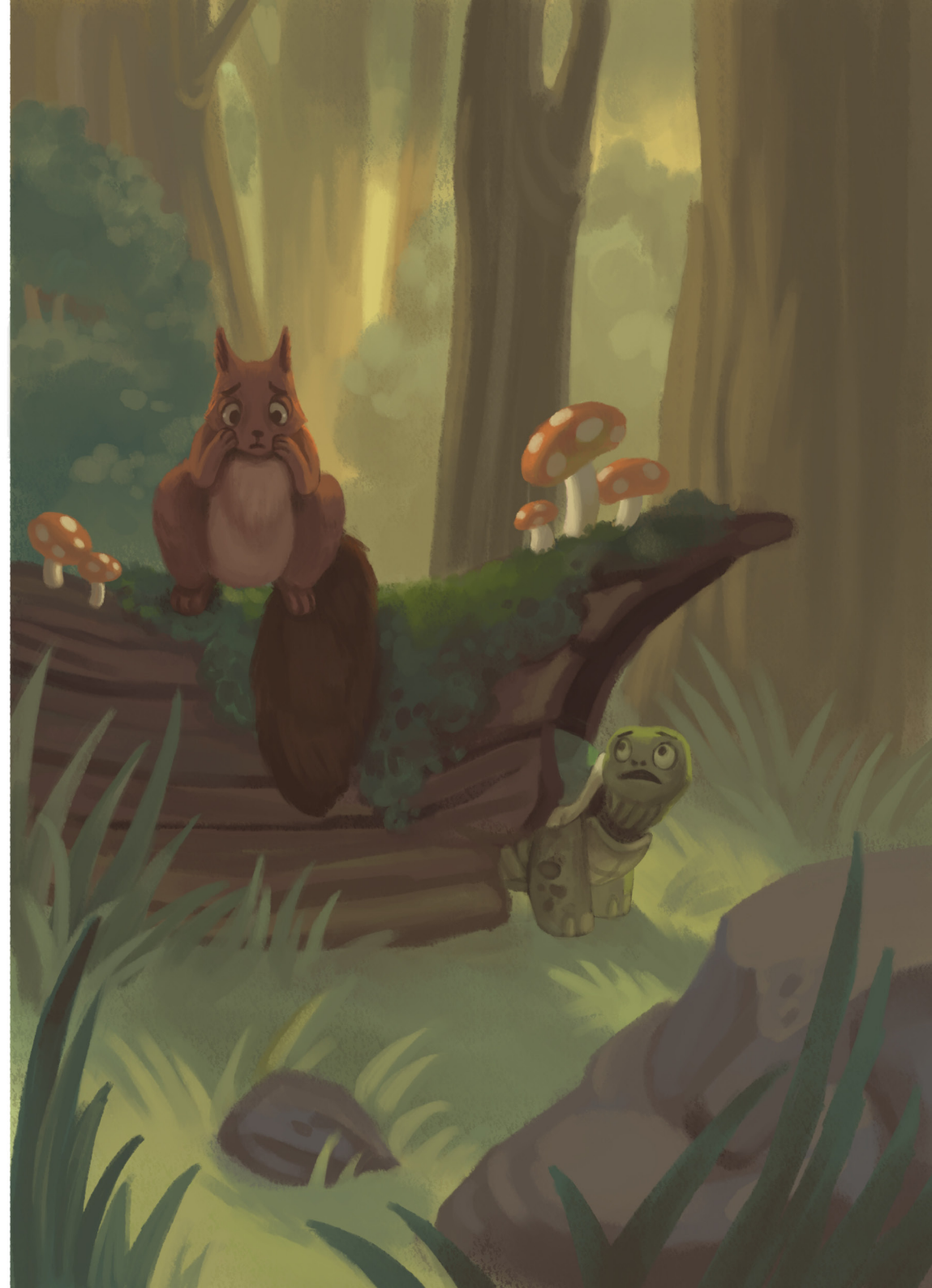
（エドガーは^{とも}いい^{とも}友^{とも}だち^{とも}じゃ^ななかつた。思^{おも}いやりが
な^{かな}くて、ぼくは^{かな}悲^{かな}しく^なな^なつ^なち^なったよ。・・・
だ^{だけ}ど、も^{もし}し^しぼ^ぼく^くが^まち^ちが^がつ^つた^たこ^こと^とを^をし^したら、
ゆる^{ゆる}して^{して}ほ^ほしい^{しい}って^{って}思^{おも}う^うだ^だら^らう^うな。そ^そう^うし^したら、
仲^なな^なお^お仲^な直^ちり^りで^でき^きる^るも^もの^のね。）

グースは、自^じ分^{ぶん}が^やる^るべ^べき^きこ^こと^とを^を知^しっ^てい^いま^まし^した^た。

「エドガー？」そ^いう^い言^いっ^て、グースは^き木^きの
み^みき^きか^から^らに^によ^よき^きつ^つと^と頭^{あたま}を^だ出^だし^しま^まし^した^た。

「グース！ そ^{じゅう}こ^こら^ら中^{ちゅう}を^をさ^さが^がし^した^たん^んだ^だよ^よ！」

「^わ分^わか^かつ^つて^てる^るよ。か^かく^くれ^れて^てて、ご^ごめ^めん^んね。・・・
ぼ^ぼく、お^おこ^こつ^つて^てた^たん^んだ^だ。」



「ぼくのせいだよ。競争の間、君に対して思いやりがなかったもの。ひどいケガをさせちゃったかもしれないしね。君はぼくの一番の友だちだし、悲しませたくないよ。ぼくをゆるしてくれる？」と、エドガーが言いました。

「うん。それに次は、何か気に入らないことがあっても、いなくなったりしないから。ちゃんと話し合っ解決すべきだったね。ぼくをさがしに来てくれて、ありがとう。君がぼくの友だちで、うれしいよ！」

「ぼくも、君が一番の友だちでうれしいよ！」と、エドガーも言いました。

二ひきの友だちは、明日はいっしょにどんな楽しいことをしようかと話しながら、仲良く並んで家に帰ったのでした。

教訓：自分が友だちに望むようなことを、自分もしてあげられる友だちになろう。

